

香川医療生協 医学生 奨学生 募集中。

奨学金制度 の趣旨

この奨学金制度は、医学部卒業後に香川医療生協・香川民医連の病院で研修し、地域医療に参加しようとする医学生を対象に、勉学などの経済的な援助を行う目的で設けています。

奨学金概要

一般	1～2年生	5万円/月額
	3～4年生	6万円/月額
	5～6年生	7万円/月額
特別	全学年	12万円/月額

※返済免除規定あり

奨学生になったら

- point ① 全国の医学生と学び合えるチャンス！
- point ② 低学年から病院実習をかさねて将来の医師像を掴める！
- point ③ 学生生活中的サポートが手厚い！

高校生予約奨学金制度
もあります。

申し込みは随時受け付けています。お気軽にお問い合わせください。

香川医療生活協同組合

厚生労働省
指定臨床研修病院 **高松平和病院**



学生サポートセンターみき



お問合せ・連絡先

高松平和病院

学生担当 / 中田、野口、花谷
tel.070-1258-6360 mail:heiwhp@gmail.com

香川民主医療機関連合会
高松市栗林町1-6-4
tel.087-836-9375
fax.087-836-9376



ブログ更新中

<http://www.heiwhp.com/>

高松平和病院 医学生・研修医のページ

検索

～日々の学習企画案内・報告をblogで随時更新中～



アンケート
はがきの返信を待た
しています。

発行元：香川民主医療機関連合会



〒760-8530 高松市栗林町1-4-1
tel.087-833-8113(代表) fax.087-833-8759

〒761-0701 木田郡三木町池戸1538-1森ハイツ1F

2018 SPRING

KIMAI Vol.10

キマイ=讃岐(さぬき)弁で「来てね」という意味

CONTENTS

- ・患者さんとの心温まるエピソード
- ・研修医座談会
- ・育児日記
- ・わたしのオススメ
- ・企画報告
- ・私の仕事・編集後記



医学生と
香川民医連を
むすぶ情報誌



香川民主医療機関連合会

70歳台後半の女性……市営団地の4階に一人暮らし。

70歳くらいまでは建築関係の仕事などをしていたが、

いまは仕事もできなくなって、生活保護を受けながら生活している。

A氏が当院を訪れたのはちょうど1年前の冬。

咳と痰が続く。タバコを吸うので、気管支炎症状があるのはいつものことだが、最近のはちょっと違う。家の近くの胃薬などをもらっている医院の先生に相談をし、胸部X線をとったところ、異常があるので、大きい病院へ行きなさいと言われて、バスが通っている高松平和病院へ来るようになった。以前は他の大きい病院へも自転車で通院したことがあるが、いまは息苦しいので、バスかタクシーかで通院しないといけない。

病院で検査を受けた結果、強皮症が合併した間質性肺炎と診断を受けた。今後かなり呼吸がしづらくなるらしい。市営団地に住んでいるが、そう言えば最近、買い物袋を提げて階段を上るのが大変になってきた。ゴミ出しなどは団地の顔見知りになにかと助けてくれる。一人息子がいるが、あまり連絡をとっておらず、日常的に世話は受けていない。

まずは禁煙をしないとけないので、禁煙外来へ通院し、5回の通院の結果、春頃には禁煙に成功した。吸入の薬を出されて、一時的には効果があったかもしれない。でも月ごとに息苦しさはどんどん激しさを増すばかりで、主治医からは酸素を吸うように言われたが、団地の4階に生活しているのに、ボンベみたいな重い物を担いでの階段の上り下りはできない。

そう言っているうちに、7月の暑くなりだした頃に熱中症かと思うような倦怠感があり家でじっとしていた。



家から出られなくないうちは家の中にある食べ物や水分でしのいでいた。ちょうど1週間の日に病院の診察があったので、その日によく病院へ受診した。

顔や足は浮腫で倍くらいに腫れていて、呼吸もつらくて、ゼイゼイって、衰弱していた。検査の結果、心不全・呼吸不全で即入院となり、何本も点滴を受けて、マスクでの大量の酸素が必要だった。個室部屋に閉じ込められて、トイレも部屋の中でしないとけない。けれど、入院して数日もすると、尿もたくさん出るにつれて体もどん

どん軽くなって、だんだん呼吸も楽になってきた。

リハビリの人がやってきて、一緒に運動をしてくれるが、いつものようには動けない。動くときはたくさんの酸素が必要らしい。治療としては、利尿剤や血管拡張剤の薬と食事制限（減塩）、酸素吸入が必要とのことで不自由な生活になってしまった。入院中は今後の生活を考えて、不眠になり、入眠剤が必要となり、また便秘にもなった。

今後の生活の場所としては団地の4階での一人暮らしはもう続けられないとは頭ではわかっている。これまでの団地の人間関係を離れるのもつらい。

まずは団地の中で1階の部屋が空いていないか聞いてみたが、空いておらず、何人も待っている状態とのこと。生活保護を受けている一人暮らしが入院しながらでは新しい家を探すのも大変。経過の中では、もう飢え死にしてみたいから4階の元の部屋に退院する、そこで死んだらええんや!と少々やけになってしまうこともあった。しかし、疎遠になっている（毎日仕事で忙しいので、そこまで疎遠というわけではなかった）息子が病院に来てくれて、病状を聞いてくれて、今後の新居を探す手伝いをしてくれることになった。

何回も市役所や不動産屋に通ってくれて、病院のソーシャルワーカーも手伝ってくれて、時間はかかったけれど、なんとか団地からそう遠くない、病院からもある程度近い新居を見つけることができた。

介護保険の認定も結果は要支援1と現状の病状とはほど遠い結果だったが、それでも使えるだけの範囲で週に

3回ヘルパーさんと週1回の訪問看護が来てくれて生活を支援してくれることになった。

足かけ3か月ほどかかったが最後は満面の笑みで、「みんなに迷惑かけました、本当にありがとうございました。」と息子さんと退院できた。

1か月後に病院へ定期通院したときは、新しい生活にいろいろと苦労しながらも、がんばって生活していく姿がみてとれた。退院して2回目に来院したときには、床にこぼしたコーヒーを拭くときに呼吸がしんどくなったことなどを話してくれた。12月であり、これから寒くなるので、かぜをひかないように気を付けましょね、と言ったのが最後の姿だった。

2回目の来院の4日後、訪問看護がたずねたときにはベッドで寝たまま動かなくなっていた。暖房はついており、部屋も片付いていた。おそらく不整脈などで眠るように、本人も気づかないうちに旅立ったと思われた。禁煙外来でお世話になった医師が往診してくれ、死亡確認をしてくれた。最後までお世話になりました。ありがとうございました。

高松平和病院 内科医

原田 真吾 医師

Doctor Harada Shingo

profile

大阪府出身

香川大学2004年卒業

茨木高校卒





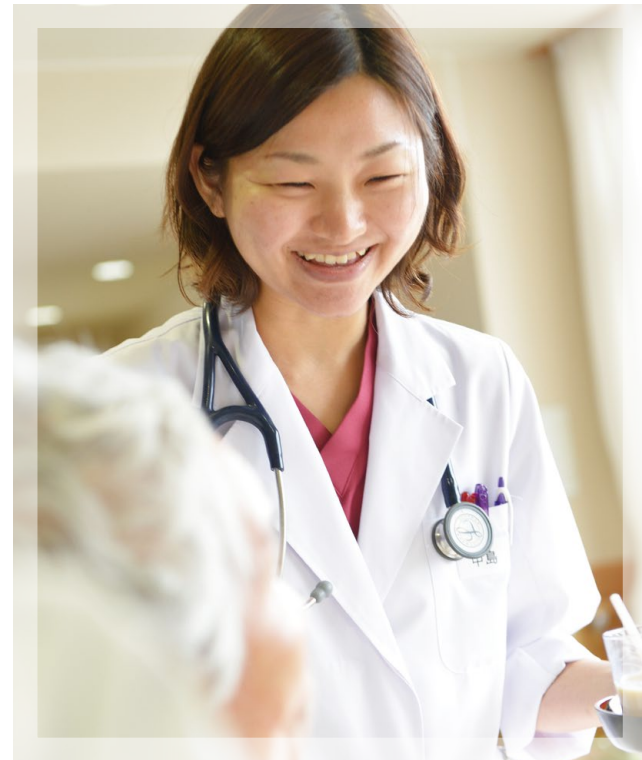
高松平和病院のホスピス緩和ケア病棟は、
「その人らしく生きていけるように」を理念に2011年7月に開設されました。
開設から7年がたとうとしています。

少しだけ当院ホスピス緩和ケア病棟の紹介をします。
病床数は21床で、入院で症状緩和が必要な進行がん患者や、残された命の長さが限られたがん終末期患者が入院する病棟です。ここ数年は診療報酬の改訂等もあり、ホスピス緩和ケア病棟でも長期入院が困難な現状があり、症状が緩和され、病状が安定すれば、退院支援を行い、自宅や施設等への退院を勧めています。

2016年度の当院ホスピス緩和ケア病棟での平均在院日数は31.6日で、全入院患者の約8割の方が死亡退院をされます。限られた入院期間の中で、「その人を知る」ことの難しさや、病状が進行する中で体力が低下し、自分で身の回りのことができなくなっていく患者さんに対して、どのように「その人らしく生きていく」ことを支えていけるのか、日々悩み考えながら診療にあたっています。

緩和ケア医6年の中で、たくさんの患者さんや家族に出会ってきましたが、緩和ケア医となったばかりの頃に担当した印象深かった患者さんがいます。「その人らしさ」を考えるとときにこの患者さんをいつも思い出します。

患者さん（以下、Aさんとする）は、60歳代の咽頭がんの男性でした。Aさんは、咽頭部がんで闘病していました。手術や放射線治療をおこなってきましたが、がんの再発のため、気道や食道が狭窄し、また嚥下機能が低下したため、気管切開となり、経鼻胃管を留置していました。日々の食事は、経鼻胃管から栄養剤を注入し補給していました。当院入院時は、気管切開のため筆談やジェスチャーでコミュニケーションをとっており、歩行もでき、病院近くへ外出することも可能でした。独身で一人暮らしのため、栄養剤の注入などの援助が難しいとのこ



とや、腫瘍が太い血管まで浸潤しており、いつ急変するかわからず、自宅療養は難しいとのことで入院した経緯がありました。

少し余談ですが、当院のホスピス緩和ケア病棟は、入院当日の面談をととても大切にしています。入院当日は、外科医にとっての手術日と同じような感覚かもしれません。患者本人の今まで歩んできた人生や、病気にどのように向き合ってきたかを教えていただきながら、今後どのように療養を行っていくのか、患者本人、家族、医療者の三者で共有し、相談していきます。この面談の中で、患者本人を知ることと、患者と医療者との関係性の構築の

場としています。

このAさんにも、いつも通り、入院時面談を行い、お話を聞き、今後のことを相談していきました。すると、Aさんよりこんなことを言われました。自宅で過ごしていたときは、毎晩晩酌をすることが日課で楽しみにしていた、と。病院ですっと過ごしているし、鼻からチューブを入れるようになり、その楽しみができないのがつらい、と。

通常の病院であれば、病院でお酒を飲むことは許されないと思います。しかし、ホスピス緩和ケア病棟では、患者本人の病室の中に限り、夕食時に1日1合程度の嗜む程度の飲酒を許可していました。しかし、Aさんは、経鼻胃管を留置中。嚥下機能は低下しており、口からお酒を味わうことは、誤嚥のリスクがあり、大変危険行為でした。でも、Aさんが日課としていたことや楽しみとしていることを、どうにか支えることはできないか。

病棟の多職種のカンファレンスで相談してみました。すると、ある看護師から、こんな意見が出されました。「経鼻胃管からお酒を入れてみてはどうか」というのです。「胃管からお酒を注入したら、お酒の風味が口や鼻の中にひろがるのではないか」というのです。

それを聞いたとき、私も半信半疑でしたし、また、今まで経鼻胃管から、そんなことしていいいの?という思いでした。というのも、経鼻胃管からは、栄養剤や水分、内服しか入れてはだめ、と変な固定概念があったのです。でも、よくよく考えれば、手技的には、チューブを通るもので、チューブの中が詰まらなければ注入はできます。

早速Aさんに提案し、家族にお酒を用意してもらい、その日の夜から、コップ1杯程度のお酒を経鼻胃管から

ホスピス緩和ケア病棟

注入しました。Aさんの反応は予想以上でした。注入してしばらくたつと、顔が赤らみ、笑顔がみられました。お酒の風味も上がってくるというのです。

それから毎日、好きなジャズ音楽を聴きながら、晩酌を楽しんでいました。毎日数種類のお酒を並べ（中には香川の地酒も!）、「今日はこのお酒を飲みたい」と、看護師に伝え、晩酌を楽しみにしていました。そして、亡くなる当日まで好きなお酒を楽しみ、穏やかに永眠されました。

一般病棟では、こういったことは実際難しいと思います。また病院でのルールもあります。同じようなことはできなくて当たり前です。

この方のエピソードを通じて、医療者がこうでなければいけない、と思っていることは、本当に正しいのか（例えば、経鼻胃管からは栄養剤や内服、水分を入れるのが通常、とか）ということ、また「その人らしく生きていけるように」ということは、何か特別なイベントを医療者が計画することではなく、その人自身の日常生活の中にある、ということを感じました。

そのためには、どの診療現場であろうと、病気だけを診るのではなく、まずは「病気の背景を知る」＝「その人を知る」ということが大切なのかもしれません。



高松平和病院 緩和ケア内科

大西 彩花 医師

Doctor Oonishi Ayaka

profile

香川県出身

香川大学2008年卒

高松第一高校卒



どうして医師になりたかったか？

安田 憧れかな。ただ僕は医師になるまでに紆余曲折あった。いわゆる再入学組で、最初は工学部を経て一般企業に。その後、青年海外協力隊に所属して2年間エチオピアでパソコン等を教えていて、帰国後今に至っている。人生ってわからないですね。植本先生はどうしてですか？

植本 僕も安田先生と同じで医師はカッコよかったよね。男の人は割と多い印象。憧れが先にくるような気がする。“先生”と呼ばれる職業はカッコいいみたいな感じ。環境的にも恵まれて、パイロットと医師のどちらになるかが、子どもの頃の夢だった。

安田 親の勧めも多少なり影響があったかな。

植本 信念だけでは中々仕事は続かないと思うけど、やりがいも含めて医師になりたいと感じていた。

研修先として、なぜこの病院を選んだか？

植本 この質問は自分も他の先生に聞いてみたいよね。他にもたくさん病院があるのになぜこの病院なのか。僕は、医師がとても多い病院は好きじゃなかった。歯車になってもいいけど大きい歯車になりたい。頼られたいという気持ちがあるかな。

安田 僕は、大学医局とのつながりが薄いところが逆に魅力を感じました。大きい病院だと自分の意見が通りにくそうだしね。高松平和病院は内科としては総合的なことができますよね。いろんな患者さんが診れるしね。

植本 大きい病院は“科”で縦割りになるから、診れる患者さんも限られてくる。内科であっても消化器から内分泌、呼吸器、循環器など専科されていく。

植本 「この人肺炎で入院したけど糖尿病ももってる。糖尿病は内分泌の先生に診てもらってね」。と、自分の専門以外の病気はほぼ他の科の医師に紹介する。うちみたいな市中の中小病院だと患者さんひとりの病気ほぼ全部対応しますもんね。(笑)
せっかく大学の時に全部勉強したんだから。僕は逆にそこにやりがいを感じますね。

安田 医師になってからもしばらく目にしていないとそのうち分からなくなるということも、あまり堂々とは言えないけど往々にしてありますね。(笑)
自分がやりがいに思っていることができるのはいいですね。

研修医 座談会

職場の雰囲気はどうですか？

安田 就職する前から高松平和病院のレントゲンカンファレンスという医師の勉強会に参加させてもらっていて、その時から雰囲気がいいなあと思っていましたね。研修医が遠慮して何も言えない雰囲気でなく楽しくやっていて、上級医は研修医が発言しやすいように声を掛けてくれていて、とても雰囲気が良かったです。

植本 それは僕のおかげといってもいいでしょうねえ(笑)

安田 (笑)

安田 実際に研修していると「無理していませんか?」「しんどくない?」とか気を遣ってくれるようになったのも助かっています。

植本 いいなあ。

安田 植本先生は心配されないんですか？

植本 多少はされているかな?まあでも、最近の業務的にはそんなにきつくはないのもあるかな。特に安田先生は最近入職したから、そういうのもあるのかもね。

高松平和病院 後期研修医

安田 理 医師

Doctor Osamu Yasuda

profile

香川大学2015年卒業

大阪府出身 茨木高等学校卒

今回の座談会は…

なぜ医師を志した理由や、

研修先を選ぶポイントなどについて

お話を伺ってみました。

病院の雰囲気について

植本 病棟のスタッフとは仲良くできてる？

安田 はい、仲良くしてますよ。植本先生は何か気をつけていることはありますか？

植本 看護師さんも含めた職場全体のパワーバランスを把握することが大事かな。(笑)

あとはスタッフの名前と顔を覚えること。何か気になることがあったり仕事を頼みたいとき、名前がわからなくて、「その看護師さん、お願い」って言っても、頼まれる方も気が悪いね。大きい病院だとスタッフの名前はさすがに全員は覚えられないけど、ここぐらいの規模だと覚えられる。

安田 大きい病院だと看護師さんがカバーしてくれない仕事も意外と多いですね。それだけ多忙だとは思いますが。こちらからすべて事細かく指示を出さないとやってくれないことが多いかな。食事のオーダーとかでも医師の仕事のひとつだけど、うちだといろいろ手助けしてくれるんで、ものすごく助かります。

Doctor
Osamu Yasuda
X
Doctor
Kazutoshi Uemoto

医学生・高校生へのメッセージ

安田 医師は、なったらなったで大変なことも多々ありますが、それ以上にやりがいのある仕事です。

あと、医師になるかどうか迷っている人でも、とりあえずは勉強も遊びも頑張ったらいと思う。

今やるべきこと、やりたいことをしっかりやっていけばいいと思います。

植本 まじめかつ(笑)

植本 お金が欲しいからという理由で医者を目指す人も一定数いると思うんですね。

たくさんもらったところで意外と残らないですよ。

お金だけで選ぶなら、もっと別の道があると思う。なんで医者になるのか?なりたいのか?

考えていれば悪い医者にはならないと思う。

高松平和病院 後期研修医

植本 一駿 医師

Doctor Kazutoshi Uemoto

profile

香川大学2014年卒業

岡山県出身

育児日記



◀一駿医師と育児を交代し、今は初期研修に励む真由医師

1月4日、妻が仕事へ出かけて行った。今まで何度か日中に妻が外出し、その時の娘の世話はしてきたが、娘と朝から夕方まで過ごすということに関しては初めての経験だった。とはいうものの、不安があったわけではなく、漠然と何をして過ごそうかといったことが頭の中を占めていて育児に関しては特に不安は感じていなかった。実際、仕事から離れてみると開放感が大きくいい気分転換になっている。

1月26日現在、育児に関しては特に不安なこともなく過ごせている。仕事に関しても再開したい気持ちもほぼ湧いてきていないし、勉強に関しては興味がある分野はしているので、知識の劣化などもあまり気にしていない。家事育児をしながら勉強ができるのかとも思っていたが、実際に時間は作ればあったため、問題なく勉強はできている。ここ1か月弱で娘に関して思ったことは、とにかく笑顔がかわいいということだった。この笑顔のためなら頑張れるという気持ちにさせてくるため時々わが娘ながら恐ろしいなと感じた。また、1月12日に娘の誕生日を迎え、1歳になり食事において様々な制約が少しずつ解除されつつある。それに伴い徐々に食べられるとされているものから食べてみて、食事のレパートリーを増やしつつある状態になっている。そろそろそろそろ歩いてほしいが、つまり立ちまでしかできず、歩くようになるのはいつになるやら…



◀料理の腕が上がりました！



▲膝に抱えてこどもと遊ぶ。



宮武 孝子 医師

Doctor Takako Miyatake
高松平和病院 小児科医 香川県出身 香川大学1995年卒 高松西高校卒

リカちゃん人形が500体以上あると言ったら驚かれたので、その話でも。最初は娘が3歳になった時に1体買っただけだったんですが、コレクター魂と医者への給料が炸裂した結果、あっという間に増殖しました。

そのリカちゃんに服を作るのが好きなんです、「いつか作るんだ…」と資材を集めるだけ集めて実際の服はなかなか仕上がっていません。そのうち27cm級、60cm級、40cm級とリカちゃん以外の人形が増え、今は11cm級の小さい子を増やしてます。

医学生さんにおすすめするとすれば、「いつか時間ができたら〇〇するんだ…」じゃなくやりたい時にやれてことです。私も老眼が進んでようやく定年後に裁縫するのは難しそうだと気づいて資材消費に入りましたよ、ちくしょうめ。



半山 栞 医師

Doctor Shiori Hanyama
高松平和病院 初期研修医 香川県出身 香川大学2017年卒 高松高等学校卒



私のお気に入りにはクマです。幼少期からクマが好きで、気付けば海外や国内旅行でご当地のクマを集めるのが楽しみになってきました。久しぶりに数えてみたら30体ほどあり、それぞれの国旗や民族衣装などで地域の特徴が表れています。なかでもお気に入りは最近仲間入りしたニュージーランドのクマです。ラグビーチームのユニフォームを着ていて、ボタンを押すとハカ（伝統儀式）の音が出ます。旅行に行った思い出として、マグカップやシールを集めるのもきっと素敵でしょうね。

佐藤 龍平 医師

Doctor Ryohei Sato
高松平和病院 内科・家庭医 香川県出身 鹿児島大学2011年卒 高松高等学校卒

僕の実家では、犬と黒猫を飼っています。仕事に疲れたらふっと実家に帰り、猫好きにはたまらない「もふもふ」をして癒されるのです。一番年上の黒猫「ぷりんさん」を筆頭に黒猫4匹、犬1匹、人2人で年齢・性別・種族を越えた「愛」が日々繰り広げられているのを見て、人間もこうありたいものだと思います…

休日を使って猫カフェに行ったり、テレビで「世界ネコ歩き」を見たりすると脳内が幸せホルモンでいっぱいになります。皆さんも勉強の合間に動物（特に猫）に触れ合うことをオススメします。



企画報告 年末企画

こどもの貧困ワークショップ」を 開催しました。

医学生が5名
看護学生が6名参加

12月26日(火)に、高松平和病院研修室で「こどもの貧困ワークショップ」を開催しました。はじめに高松平和病院の原田医師よりSDH(健康の社会的決定要因)について話がありました。貧困や生活環境が疾病や健康に作用すること、これは民医連が創立以来持ってきた問題意識であり、健康格差対策では一人の医療従事者にできること、病院でできること、地域住民や他の地域団体と協力しないとできないこと、市町村や国の政策を変えることが必要なものまで、様々なレベルがあると述べられました。学習講演の講師は、香川スクールソーシャルワーカー協会の柳田さん、へいわこどもクリニックの岡野看護師に来ていただきました。柳田さんからは、スクールソーシャルワーカーの仕事内容や、こども食堂の事例をもとに、「こどもの貧困は見た目には分かりにくい。また、貧困家庭と思われることを嫌う人も多く、アプローチには工夫が必要。」と話していただきました。こども食堂の取り組みにおいて、地域での学習や食を通じて地域の大人がこどもを見守り、地域の大人とこどもが交流する居場所を目指したいと述べられました。岡野看護師からは、へいわこどもクリニックでの事例をもとにこどもの貧困について発表していただきました。育児能力の低い家族が、子育てをするには困難が大きいことや、親の自己責任論で子育ての問題を考えることは、より問題を深刻化し、世代間連鎖を引き起こすと話されました。講演後は班ごとに分かれ、講演で聞いた困難事例をSDHの視点に立って感想交流しました。午後からは、へいわこどもクリニックと繋がりのある子ども達と一緒に、カレー作りや、外遊び、学習サポートをして楽しく交流しました。無邪気に遊ぶこどもたちはどこを切り取っても微笑ましいものでした。今回のワークショップでは、こどもの貧困が6人に1人が貧困状態にある事実を知り、貧困問題について理解を深めることができました。

感想

- 貧困家庭の子どもたちのことが問題になっていることは知っていたが、事例など実際の生活について知ることができ、今後の子どもの生活や将来への支援が大切だと感じた。
- 子どもたちが遊んだり、勉強したりしている所を見ると、他の子と何ら変わりなく見えるが、服装などの細かい部分で“貧困”を感じる場面もあり、注意深く観察していかないと貧困には気付けないと感じた。



▲岡野Ns発表の様子



▲班ごとに感想交流



▲柳田SSWの講演の様子

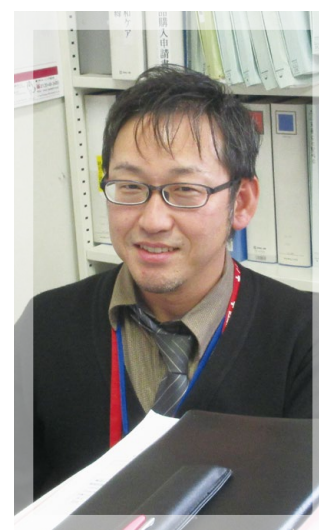


▲柳田SSWの講演の様子



▲カレー作り

私の仕事



高松平和病院
事務長

中津 洋二

皆さん、はじめまして。高松平和病院で事務職員として働いています中津です。病院の職員といえば医師・看護師・技師・セラピスト等の国家資格をもった医療従事者が真っ先に連想されますよね。しかし事務も保険請求業務や健診業務、庶務業務、管理業務などと併せて国家資格を持った職種間の調整などを担っているりっぱな「医療従事者」である自負しています。

その中で業務に励む中、どんな職種であれ日常的にストレスは溜まるものですよね?私はそのストレスを出来るだけ溜めないようにしています。あまり参考にならないかもしれませんが、私の「ストレス解消法・趣味」についてお話しします。

休日に限ってですが「①早起きすること」、「②体を動かすこと」を実践しています。①は1日を有意義に過ごすために朝早くから活動します。なぜが休日の朝は寝覚めが良く早起きが出来ています。②は主にスポーツで体を動かして汗を流します。最近は2人の息子とソフトテニスに励んでいてとても楽しく過ごせています。どんなに疲れていても休日の朝は早起きして子供たちと体を動かすことが今のストレス解消と趣味になっています。

現代社会では、常時、多種多様な要求や期待に対応したり考えたりして、心と体をリラックスさせることが出来なくなっています。皆さんも多忙な毎日を過ごしながらでも、心と体のケアを身近なところからはじめてみてはいかがでしょうか。



内科部長・原田真吾医師の「イシメシ」。高松平和病院の医局には、週に2回製麺所からうどんが届きます。美味しくそうに食べていますね。



先日、今年2回目になる模擬面接が開催されました。医学部受験を目前に、どの学生さんも真剣に取り組んでくれていました。「みんな合格しますように。」学生担当者の願いです。(花谷)



▲学生さんが使いやすい様にサボセンをリニューアルしました。ぜひ遊びに来て下さい。



▲学生担当スタッフです。よろしくお願い致します!

編集後記

[アンケートはがき・KIMAI2017秋冬号の感想]

- 香川民医連の病院にリハビリの専門の医師がいっぱいいるのを初めて知りました。(医学部3年生)
- hair donationは誰にも気軽にでき、患者さんへの協力だと思うので魅力的にかんじました。(医学科3年)
- 研修医になったら具体的にどのような事をするのかよく分かった。(高校1年生)